

幸せな余生

愛知県犬山市の博物館明治村は、歴史上価値のある明治の建築物を全国から移築保存している野外博物館であり、近代日本の幕開けとなった明治という時代をしのぶテーマパークでもある。

思えば、かつて秋田でも近代洋風建築は数多く見かけられた。それらは地域がたどった歴史の貴重な生き証人であり、町並みに風情をもたらし、観光資源にもなりうるものであったが、残念ながらそれらの多くは、老朽化や再開発の名のもとに、取り壊しという運命をたどったのである。

しかし、失ってしまったからではそれこそ「後の祭り」なのだ。明治村の発想は、戦後の高度成長期に多くの貴重な近代建築がどんどん取り壊されていくことを嘆いた建築家と企業家の熱意から生まれたものだった。

その明治村で、「動く展示品」としてレトロなSL列車が走っている。2両あるSLのうちの1両は、まさに日本で最初に開通した新橋・横浜間を走った日本最古の蒸気機関車だ。それが今でも入村者の村内移動手段として毎日頻繁に運行されているのだ。

そのSLにけん引される3両のかわいい客車。明治の鉄道車両というのはこういうものかとリアルに実感できるこの客車は、実は明治村に来る前は秋田県内で走っていた。3両とも、昭和48年（1973）年に廃止になった羽後交通雄勝線に在籍し、湯沢駅と羽後町の桟駅ふもととのあいだを走っていたのだ。

ハフ11と呼ばれるマッチ箱のような客車は、昭和11年（1936）に山形県の高畠鉄道から譲り受け、雄勝線の車両となった。製造は明治41年（1908）年というから、今年でちょうど百歳！ 一般に、鉄道車両の寿命は20年程度と言われているようだから、百歳で現役というのは奇跡的ですからある。

「車内や足回りは羽後交通さん時代のままですが、腐食しやすい外装は手を加えさせてもらっています」と、乗務員さんは少し恐縮がる。いやいや、そこまでして大切にしてもらったら秋田の人間としても本望だ。

ぜひ機会をつくって、明治村で頑張っている秋田っ子車両に会いに行っていたきたい。



かつて秋田を走っていた鉄道車両が、明治という時代の生きた史料として今でも元気に明治村で走っているというのは、秋田人としてもちょっと誇らしい気分。今年百歳の老雄車両に乗りに行こう